

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780147

研究課題名(和文)19世紀イギリスにおける経済的自由主義の展開

研究課題名(英文)British Economic Liberalism in the Nineteenth Century

研究代表者

中井 大介(NAKAI, Daisuke)

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：70454634

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主な目的は、第1に、19世紀における功利主義や自由主義の歴史的展開を詳細に検討すること、第2に、それらがその後の経済学の発展を通じてどのように受容されていったのかを検証することである。以上を通じて、経済学の背後にある功利主義的・自由主義的思想の特徴を、可能な限り明確に浮かび上がらせるべく研究を進めた。

経済思想の変遷を辿るために、自由主義やパターナリズムといった言葉が主要な経済学者においてのみならず、新聞記事を含む当時の多様な議論でどのように活用されたのかについても調査を実施した。そしてJ.S.ミルの経済思想を中心に据えながら論文の刊行や国内外の学会での研究成果の発表などを実施した。

研究成果の概要(英文)：The main objectives of this paper are as follows. First, I focused on the historical development of utilitarianism and liberalism in the nineteenth century. Second, I examined how they were accepted through the development of economic doctrines. Through the above examinations, I tried to emphasize the characteristics of utilitarian and liberal ideas. In order to follow the transition of economic ideas, I also examined how the word such as 'liberalism' and 'paternalism' were employed not only in major economic thinkers but also in diverse discussions at the same time including newspaper articles. Whilst focusing on J. S. Mill's economic thought, I published and presented papers both in Japan and abroad.

研究分野：経済学説史・経済思想

キーワード：経済的自由主義 功利主義 パターナリズム

1. 研究開始当初の背景

一般に経済学とリベラリズム(自由主義)との関係は、緊密であると認識されている。市場における各個人や各経済主体の自由な経済活動こそが、全体として効率的で豊かな経済社会を実現する原動力であるという認識は、経済学という学問領域にとどまらず、広く一般に浸透した経済思想ないしは経済観とさえ言えるかもしれない。

むしろ、現代の経済学の学問的状況を展望すれば、ポスト・ケインズ派経済学、進化経済学、最近の行動経済学などのような、多様な展開が存在している。現代経済学のなかで主流を占める新古典派経済学、ミクロ的基礎づけを軸とした経済成長論・DSGEモデルなど打ち出すマクロ経済学においても、そこには多様な展開が存在している。さらには、そもそもリベラリズムという概念自体が、きわめて多義的でさまざまに解釈される概念であることなどから、経済学=リベラリズムという図式がそれほど単純に成立するわけではないことも事実である。

とはいえ、少なくとも他の学問領域などから眺めた場合には、しばしば経済学の背後にある思想は(経済的)リベラリズムないしは個人主義であるとも見なされており、これはある意味でアダム・スミスにさかのぼる経済学の伝統であると受け止められている。そして、経済学の自由主義的なインプリケーションに対しては、ハイエクなどによってここに経済学の強みがあるとして積極的に強調される一方で、例えばレッセ・フェールへの反発といったかたちで19世紀から繰り返し疑義が提出されている。さらに経済的混迷を極める現代的な状況において、経済的自由主義の主張をネオリベラリズムと位置付けて、強く批判する傾向なども存在している。

2. 研究の目的

以上のような経済学に関する学問的状況を念頭に置きつつ、本研究「19世紀イギリスにおける経済的自由主義の展開」の最終的な目標は、経済学の背後にある功利主義的・自由主義的思想の特徴を可能な限り明確に浮かび上がらせることである。そこで、特に次の2つの点に着目しながら、経済的自由主義の性質について探ることを目的としている。

(1) 第1に、19世紀(より正確には18世紀後半以降)に展開された、功利主義と経済思想の関係に着目する。「最大多数の最大幸福」というキャッチフレーズによって広く知られる功利主義は、その起源をアリストテレスにさかのぼるとも言われるが、18世紀終わり以降にイギリスの法学者・思想家であるベン

サムによって鮮明に打ち出され、19世紀にかけてJ.S.ミルやシジウィックの手を通じて明示的に展開されることになった。ベンサム、J.S.ミル、シジウィックは、功利主義に基づきながら、しばしば急進的でさえあるリベラルな主張を展開した人物として知られている。さらに彼らは、やはり功利主義を軸としながら自らの倫理学や政治学を展開した哲学者として、さらには古典派経済学の発展や近代経済学の形成においても極めて重要な役割を果たした存在として高く評価されている。

近年のベンサムに関する文献としては、例えば Phillop Schofield 著 *Utility and Democracy: The Political Thought of Jeremy Bentham* (2006)において、未刊行の書簡類なども踏まえつつ、ベンサムの政治思想が包括的に提示されている。J.S.ミルに関する研究としては、Jonathan Riley 氏の諸著作や David Weinstein 著 *Utilitarianism and New Liberalism* (2007)において、自由主義・理想主義としてのミルの功利主義思想の特徴が描き出されている。またシジウィックに関しては、Bart Schultz 著 *Henry Sidgwick: Eye of the Universe - An Intellectual Biography* (2004)や拙著『功利主義と経済学：シジウィックの実践哲学の射程』(2009)などを通じて、これまであまり注目されてこなかった彼の人物像や政治・経済思想が注目されつつある。本研究では、以上のような近年の研究蓄積を土台としながら、3人の功利主義者を通じて経済学とリベラリズムとの関係を改めて検討する。

(2) 第2に、功利主義とも重要な関係を抱きつつ、19世紀に展開された自由主義的な経済思想が、どのように評価され、受容されていたのか(あるいは受容されなかったのか)について着目する。そこでまず、19世紀半ば以降の理想主義やニューリベラリズムの立場からの批判が検討に値する。ベンサム、J.S.ミル、シジウィックらの主張は、コブデンやマンチェスター学派らの唱えるレッセ・フェールとは明らかに一線を画するものであり、レッセ・フェールを批判することもその目的の1つでさえあった。とはいえ、(J.S.ミルはやや例外ではあるが)個人主義や快樂主義を擁護する主張であるとして、強い反発を招くことにもなった。さらに、20世紀前半における、ケインズやハイエクといった重要な経済学者らの反応についても検討に値する。ケインズはレッセフェールや古典派経済学を強く非難する一方で、功利主義やベンサム主義には微妙な態度を示している。あるいはハイエクは、必ずしも功利主義を高く評価しているわけではないが、社会主義・全体主義を糾弾しつつ自らの経済的自由主義を強く打ち出す場合に、J.S.ミルやシジウィックらの名前を挙げながら、繰り返し19世紀の個人主

義の重要性を訴えている。

現代の困難な経済情勢にあって、経済学や自由主義に対する疑問の声が高まりつつある。本研究は直接現代的な課題を検討するものではない。しかし、以上のような 19 世紀における功利主義や自由主義の歴史的展開を詳細に検討することで、経済的自由主義の特徴をより明確に理解することが可能となるかもしれない。またそれは、我々の直面する現代的な課題に対して、大きな示唆を与える可能性を秘めていると考えられる。

3. 研究の方法

本研究(19 世紀イギリスにおける経済的自由主義の展開)の主な目的は、第 1 に、19 世紀における功利主義や自由主義の歴史的展開を詳細に検討すること、第 2 に、それらがその後の経済学の発展を通じてどのように受容されていったのかを検証することである。以上を通じて、経済学の背後にあると言われる功利主義的・自由主義的思想の特徴を、可能な限り明確に浮かび上がらせるべく研究を進めた。

経済学史・経済思想研究において精度の高い研究を進めるためには、歴史的コンテキストに照らした一次文献および二次文献の綿密な調査・分析、ならびに関連する専門研究者との活発な学術的交流を通じた研究内容の精査が不可欠である。そこで以下に記すように、資料収集・調査などのインプットを基本的な方法としながら、さらにそれらを精査して論文あるいは研究報告として発表し、さらなるブラッシュアップを通じて、より精度の高い研究となるべく努めてきた。

一字文献の収集に関しては、ロンドン大学のベンサム・プロジェクトのメンバーなどともコンタクトを取りつつ、英国ケンブリッジ大学図書館や大英図書館の 19 世紀英国新聞記事のデータベースなどを活用しつつ、資料収集・分析を進めるなどしてきた。さらに、T.H. グリーンらの理想主義やニューリベラリズム、あるいはケインズやハイエクなどによる 19 世紀自由主義・功利主義に対する評価やその受容過程について分析を実施するために、より幅広い一次文献・二次文献の精査を実施した。また、そのような収集・分析に基づきながら、「4. 研究成果」にあるような、学術論文、国内外での学会報告、著作の刊行などを通じて研究成果の発表・公刊を積極的に進めてきた。

4. 研究成果

(1) 平成 25 年度の主要実績は次の 3 点であ

る。第 1 に、J.S.ミル(1806-73)の経済思想・自由主義に関連する研究として、単著論文「マーシャル『経済学原理』における人間観 -J.S.ミルとの関係から-」(柳田・諸泉・近藤編『マルサス、ミル、マーシャル—人間と富との経済思想-』所収、2013 年 11 月、昭和堂)を刊行した。本論文は、近代経済学の枠組みを確立した A. マーシャル(1842-1924)の『経済学原理』(1890 年初版)にミルの与えた影響について、近年の重要な 2 つのマーシャル研究(Raffaelli 2006, *Marshall's Evolutionary Economics*, Routledge; Cook 2009, *The Intellectual Foundations of Alfred Marshall's Economic Science: A Rounded Globe of Knowledge*, Cambridge University Press)を踏まえながら考察したものである。

第 2 に、名古屋大学大学院経済学研究科ワークショップ社会経済研究にて、「ミルの経済思想の系譜：マーシャルとシジウィックを通じて」(2013 年 12 月)というタイトルにて研究発表を実施した。同発表は上記の論文とも関連し、ミルをターゲットとして、その自由主義的・功利主義的経済思想が 19 世紀後半の経済思想に与えたインパクトを検証した。

第 3 に、研究集会「功利主義と公共性」にて「経済学におけるパターナル・アイデア」(2014 年 3 月)というタイトルで研究発表を実施した。同発表は「功利主義と公共性：「経済」は人々に「幸福」をもたらすか？」(課題番号:23330067)とも関連し、「パターナリズム」は「リベラリズム」を検証するうえで重要な判断材料となりうる点などを論じた。

(2) 平成 26 年度における主な研究成果は次の 2 点である。第 1 に、平成 26 年 8 月に横浜で開催された国際学会 International Society for Utilitarian Studies (国際功利主義学会)にて、Paternalistic Ideas of Nineteenth Century Economic Thought と題する研究報告(単独)を行った。同報告および論文は、自由主義(リベラリズム)と干渉主義(パターナリズム)の関係を 19 世紀経済思想史の観点から読み解くものであり、本研究における骨格となる議論として位置づけられる。パターナリズムとリベラリズムは一般に対立する概念・概念と見なされているが、近年では行動経済学などの分野においてリバタリアン・パターナリズムとして、両者を引き合わせる視点が注目を集めている。同報告・論文はこうした状況を念頭に、19 世紀の自由主義経済学とパターナリズムの関係を、当時の干渉的介入(パターナリスティック・インタフェレンス)の語彙的コンテキストを踏まえながら扱ったものである。

第 2 に、イギリス理想主義研究会全国大

会（南山大学）において、「イギリス主流経済学における理想主義的側面」というタイトルで研究発表を実施した。同報告は、19世紀経済学の歴史の趨勢を踏まえながら、とりわけ主流派経済学において理想主義的な思想・価値観がどのように展開されたのかを扱ったものである。

(3) 平成 27 年度の主要業績は次の 2 点である。前述のイギリス理想主義研究会での方向内容をベースとした研究の刊行として、学術雑誌『イギリス理想主義研究年報』第 11 号に掲載された、単著論文「イギリス主流経済学における理想主義的側面：ポリティカル・エコノミーからエコノミクスへ」 pp. 19-27. がある。同論文では、アダム・スミス以来の本格的な経済学の形成を踏まえつつ、本研究のテーマである 19 世紀から 20 世紀にかけてのイギリス主流経済学の変容について、その理想主義的側面や自由主義との関係に注目しながら明らかにしたものである。第一に、『道徳感情論』を踏まえれば、スミスの経済思想は単に利己心に集約されるものではなく、むしろ理想の人間観や幸福観が鑄込まれていることを論じた。第二に、リカードやマルサスを経て、古典派経済学を完成させたとされる J.S.ミルの経済思想について、『自由論』や『功利主義論』で展開される理想主義的・自由主義的な観点こそが、その中心の原理を形成していることを論じた。第三に、19 世紀後半の限界革命を経て、理論化を進めた経済学の歴史において、なおケインズは美的・芸術的世界に関する価値観を一つの軸として、自由と経済の問題に向き合ったことを論じた。

第 2 に、単著論文「イギリスにおける功利主義思想の形成」大瀧・宇野・加藤編『社会科学における善と正義 ロールズ「正義論」を超えて』東京大学出版会所収を刊行した。同論文は、東京大学社会科学研究所『社会科学研究』第 63 巻第 3,4 合併号に掲載された論文を加筆修正のうえ再録したもので、ベンサム、ミル、シジウィックと連なるイギリス功利主義・自由主義思想の変遷について、経済学を基軸として考察したものである。古典的功利主義の代表格とされる彼ら 3 者の自由主義的経済思想の異動を明らかにした。

(4) 平成 28 年度の主要業績は次の 3 点である。第一に、2016 年 7 月にリール・カトリック大学で開催された国際功利主義学会（International Society for Utilitarian Studies）に出席し、19 世紀イギリス最大の哲学者・経済学者でありなおかつ自由主義者として知られる J.S.ミルの経済思想・自由主義観についての研究成果を発表した（Idealistic Aspects of J. S. Mill's Political Economy）。同報告では、利己心で

はなく究極的には利他心を人間性の本質に据える理想主義的にミルの人間観が、彼の経済思想や自由主義思想にダイレクトに影響を与えていることなどを明らかにした。

第 2 に、日本イギリス哲学会第 41 回大会のシンポジウム「功利主義と人間の尊厳」の登壇者として、「功利主義と人間の尊厳 経済学の歴史的展開との関連から」と題する研究報告を実施した。何かと批判的に考察されることの多い功利主義に対して、むしろ経済思想・自由主義思想との結びつきに着目するならば、全体としての効率性の実現や豊かさの増進を通じて、かえって人間の尊厳をポジティブに後押ししうる可能性などについて論じた。さらに同シンポジウムでは、ベンサムの政治思想やミルの倫理思想についての発表も実施された。

第 3 に、また本研究課題と直接関連する重要な専門文献である、Fleischacker 著 *A Short History of Distributive Justice*, Harvard University Press について、同著の邦訳書『分配的正義の歴史』晃洋書房を 2017 年 3 月に出版した。同著は、分配的正義を軸として、政治哲学史を再構築する試みであり、プラトンやアリストテレスからロールズ以後の現代までをカバーしている。フライシャッカーは、政治的自由や政治的権利に関する抽象的問題よりも、財やサービスの分配という具体的な経済問題に着目することによって、とりわけ近代において貧者や貧困に対する認識が決定的に変化した局面を、鮮明に描き出している。フライシャッカー自身が強調しているように、本書は道徳・政治哲学史と現代政治理論を互いに結び合わせる試みであると同時に、経済思想と道徳・政治哲学を繋ぐ試みとしても、あるいは貧困や開発に関する現代的な認識の特徴を探る試みとしても、極めて示唆に富んでいるように思われる（訳者あとがきを参照）。本研究のテーマである経済的自由主義の変遷を見極めるうえで、分配的正義という概念が極めて重要な参照点となりうるということが明らかになった。また同訳書は、日本の学界において自由主義・功利主義・経済思想に関するさらなる研究を進展させるうえで、今後大きな役割を果たすことが期待される。

その他に未刊行のものとして、著書・論文・訳書などとしては、「経済学と功利主義の関係性：功利主義へのリアクションを通じて」を執筆した。同論文は有江大介編『功利主義と公共性』所収として出版予定である。この他にも前述の英語論文の海外ジャーナルへの投稿のための改定作業を順次進めている。また新たな検討課題として、自由主義と政府介入の境目を見極めるうえで重要と考えられる「温情的な政府」という概念などにも注目しながら、18 世紀から 20 世紀にか

けての経済的自由主義の変遷について今後も史料調査や学会報告、論文執筆などを進展させていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

中井大介(単独)「イギリス主流経済学における理想主義的側面」『イギリス理想主義研究年報』第 11 号 19-27 頁 2015 年(査読無)

[学会発表](計 6 件)

中井大介(単独)「ミルの経済思想の系譜：マーシャルとシジウィックを通じて」名古屋大学大学院経済学研究科ワークショップ(招待講演) 2013 年 12 月 25 日 名古屋大学

中井大介(単独)「経済学におけるパターン・アイデア」研究集会：功利主義と公共性 2014 年 3 月 22 日 横浜国立大学

Daisuke Nakai(単独)「Paternalistic Ideas in Nineteenth Century Economic Thought」International Society for Utilitarian Studies 2014 年 8 月 22 日 Yokohama National University

中井大介(単独)「イギリス主流経済学における理想主義的側面」イギリス理想主義学会 2014 年次大会 2014 年 8 月 30 日 南山大学

Daisuke Nakai(単独)「Idealistic Aspects of J. S. Mill's Political Economy」International Society for Utilitarian Studies 2016 年 7 月 7 日 Lille Catholic University, France

中井大介(単独)「功利主義と人間の尊厳 経済学の歴史的展開との関連から」日本イギリス哲学会第 41 回大会(シンポジウム報告者として) 2017 年 3 月 28 日 南山大学

[図書](計 3 件)

中井大介(単独)「マーシャル『経済学原理』における人間観 J.S.ミルと

の関係から」柳田・諸泉・近藤編『マルサス、ミル、マーシャル 人間と富の経済思想』昭和堂 179-203 頁 2013 年

中井大介(単独)「イギリスにおける功利主義思想の形成」大瀧・宇野・加藤編『社会科学における善と正義 ロールズ「正義論」を超えて』東京大学出版会 77-97 頁 2015 年

中井大介(単独翻訳)『分配的正義の歴史』晃洋書房 全 275 頁 2017 年 (Samuel Fleischacker 著 *A Short History of Distributive Justice*, Harvard University Press の全訳)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

中井 大介 (NAKAI, Daisuke)
近畿大学・経済学部・准教授
研究者番号：70454634

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()